

在外研究報告

アメリカ仏教学管見

吉 津 宜 英

— ヴァージニア大学宗教学部

昭和六十年度駒澤大学在外研究員としてアメリカ合衆国ヴァージニア州シャーロッツビルにあるヴァージニア大⁽¹⁾に約十ヶ月滞在し、その間アメリカの仏教研究について若干の見聞を得たので、報告させていただきたい。シャーロッツビルは首都ワシントンから百七十キロ、州都リッチモンドから百十キロの所に位置する人口六万人ぐらいの小さな町である。

大学の創設者であるアメリカ第三代大統領トマス・ジェファーソンの生家に近い、この地が選ばれ、一八一九年に大学が設立された。学生数は約一万五千、教員数約千五百名を有する州立大学である。図書の収蔵量は全米の中で二十五位にランクされている。大学には医、法、工、教育、経営、建築、看護、商、そして文理の九つのスクールもしくはカレッジが設けられ、さらに最後の文理学校の中にはアメリカ黒人および

アフリカ研究学部からスペイン語学部に至る三十四の学部⁽³⁾が所属する。私が御世話になつた宗教学部もその中に位置する。

宗教学部には名簿上では八名の正教授、六名の準教授、七名の助教授、そして四名の講師が登載されている。⁽⁴⁾それらの教授たちを分野別に配列してみると、次のようになる。ただし、名簿上の全員をつくしていないことを御了解いただきたい。

- 宗教と文学 スコット正教授、ブシャード助教授
- キリスト教史 ウィルケン正教授、エール助教授
- 旧約聖書 アンダーソン教授⁽⁵⁾
- 新約聖書 ギャンブル準教授
- 宗教学哲学 シャールマン教授、フェレイラ準教授
- アメリカの宗教 ファガティ準教授、コリガン助教授
- アフリカの宗教 レイ準教授
- 倫理 チルドレス正教授、リトル正教授
- イスラム教 シャチディナ準教授

ユダヤ教 ジャ ffi 助教授

ヒンドゥ教 ラオ正教授

仏教 ホプキンス準教授、グローナー助教授、ラング助教授

さて、この分類表で、だいたい、どのような分野の先生方が宗教学部に所属しているかがやや御理解いただけたであろう。ともかく、仏教を専門にしている先生が三人もおられることは注目されるところであり、その中のポール・グローナーこそは我が友人である。

さて、これら三人の先生方の紹介と、どんな講座を開いているかを示してみよう。先ずホプキンス準教授から始めよう。実は私がヴァージニア大に行くことに決めたと公にしたときに袴谷憲昭先生や松本史朗先生から「あそこにはホプキンスが居ますね」と言われ、びっくりしたのを思い出す。袴谷先生の「マジソン滞在記」にすでにこの方がことが紹介されているのに、私の認識不足であった。一九五八年ゲシェリワングル⁽⁷⁾によつてニュージャージー州に設立されたチベット仏教僧院⁽⁸⁾で現在アムハースト大の教授であるロバート・サーマン⁽⁹⁾などとともにホプキンス先生はワングル師から、それこそ口伝のごとき教育を受けたのである。私はシャーロッソビルを離れる直前にグローナー夫妻と共にホプキンス家に招待された時のことと思い起している。一階の応接間の壁にワングル師の前でホプキンス先生たちがチベット仏教風の法衣を着

て、チベット仏教の聖典を学んでいる大きな写真一葉がはりつけてあつた。先生にとつては原点ともいいうべき、思い出深いものなのであらうと感じられた。ついでに、その夜のことを二、三書きとめておこう。まず到着するとすぐに地下に案内された。そこは先生の書斎でもあるが、本堂と称してもいい程の莊嚴でチベット仏教の諸仏諸菩薩、そして諸論師たちがせいぞろいしていた。先生と奥様はここで朝晩の勤行もさるし、また時々はチベット僧を招いての法会も催されるのである。さて食事が始まるやいなや、夫妻と同居している手伝いの学生とでチベット語の御経が始まった。つまりチベット風五觀の偈らしいが、ともかくびっくりした。夫妻は戒を保つていて酒を飲まず、グローナー夫妻と私とはワインをいた。最後に、博士論文を公刊されたものである『空の瞑想』⁽¹¹⁾という御本を頂戴して、おいとました次第である。先生には沢山の著作もあり、多くの学生も就いていて、当然正教授になられる資格があるよう思ひが、昨年から今年にかけての再度のチャレンジに失敗されたのは誠に残念である。次にラング助教授に移ろう。ラング先生はワシントン大でルエッグ教授⁽¹³⁾の弟子であった。小がらで、いつもニコニコされている女性で、車を運転せず、歩いておられる姿は同じく歩き族である私には好感が持てた。先生が何のテーマで博士号を取られたか確認はしていないが、後で述べる十一月の全

米の宗教学会ではブッダゴーサ（仏音）について発表しておられる。⁽¹⁴⁾

さて、いよいよ我が友、ポール・グローナー助教授について語ろう。彼は徹底して私のことを「吉津さん」と敬称で呼んでくれたが、私は三歳年下の彼をポールなるファーストネームで呼び続けたので、今ここでも以下の記述の中で「ポール」という愛称を用いることを許していただきたい。一九八三年のことだつたらうか、大西龍峯先生の夫人ナタリイさんがポールを私に紹介した。その時彼は大正大学で、すでに公刊されている『最澄』⁽¹⁵⁾の最後の仕上げをしていて、駒大の図書館にも時々来ていたのだった。渋谷あたりで一夜共に飲みあかした時に「在外研究員の順番が回つてきたら、ヴァージニア大に行きますよ」との一言が現実になつたのである。ビザの申請のためのヴァージニア大学からの書類獲得から最後の帰国そのため安い航空切符の入手に至るまで彼には筆舌につくし難い御世話をいただいた。ここで満腔の謝意を表しておきたい。

彼はイエール大のスタンレー・ワインスタイン教授について日本仏教、特に天台宗の研究を行つた。すでに一九七三年に来日し、東大や大正大で学び、イエール大で博士号修得のうちにヴァージニア大に職を得て、改めて来日し、大正大で『最澄』出版の最後のチェックをしておられた時に我々は出

会つたことになる。彼は次に元三大師良源（九二一八五）について本を出したないと用意しており、全米の宗教学会でもそれに関する発表を行つた。⁽¹⁷⁾また平川彰博士の『インド仏教史』上下二巻（春秋社刊）のうち『上巻』のポール・グローナー英訳が来年（一九八七年）ハワイ大学出版部から出る。これは長年の平川先生のポールへの御指導への一分の感謝の表明であると何回も述懐していた。そして、この英訳の甲斐もあり、もちろん先の『最澄』の評価も高く、さらに学内での教授ぶりにも定評があり、昨年から今年三月にかけての助教授から准教授への昇任に成功し、併せてテニュア（終身在職権、七十歳定年まで）をも獲得したことは大変に慶賀すべきことである。

さて以上の三人の先生たちが、ヴァージニア大宗教学部でどのような講義を開いておられるかを示して、この項をしめくくることにしよう。これは一九八五年秋学期のシラブス（要項）による。

- 〔東洋宗教概説〕 グローナー氏
- 〔仏教入門〕 ラング女史
- 〔仏教瞑想〕 ホブキンス氏
- 〔日本宗教〕 グローナー氏
- 〔サンスクリット宗教文献〕 ラング女史
- 〔ヒンドゥ教演習〕 ラング女史

「大乗仏教演習」 ホブキンス氏

「中国仏教講読」 グローナー氏

「上級チベット語」 ホブキンス氏

「上級サンスクリット・パーリ語」 ラング女史

私はポール・グローナーの三つの授業に出席した。「東洋宗教概説」は五十分授業週二回で、百名以上の大部屋授業なので、三人の大学院生が補助（ティーチング・アシスタント）に行く。「日本宗教」も学部の授業で、こちらは二十名以内の小じんまりしたクラスであった。一時間十五分授業で、週二回である。「中国仏教講読」は大学院の演習で週一回三時間ホールの自宅で行なわれた。ホブキンス氏やラング女史の授業には出席しなかつたが、ホブキンス氏の「上級チベット語」⁽¹⁹⁾ではかつて大谷大学の小谷信千代氏が紹介されたようにドラマの台詞を暗記して、実演するような教授法が取られているとのことであった。

二 共同研究と授業

三月三十日（金）正午ごろワシントン空港からの十人乗り飛行機がシャーロットビル空港に到着した。そこにすらりとして、片手をズボンのポケットに入れ、あいかわらず豊かなあごひげをたくわえたポールを見い出した時の安堵感は今でもはつきりと思い出すことが出来る。すぐに自宅に案内され、

シンディ夫人、長男カイ君（七歳）、そして双子の女の子、アニヤちゃん、マヤちゃん（三歳）たちを紹介された。これから約十一ヶ月、単身赴任であつた私はこれらグローナー家の人々にどれほどなぐさめられたことであろうか。双子ちゃんに「アンクルヨッシー」と声をかけられるだけで、特効薬のように私のストレスは和らいだ。

さてポールと私との共同研究のテーマは「日本における天台と華厳の交流に関する共同研究」というものであった。五月十九日に卒業式が終るやいなや五月二十二日（水）から毎週一回三時間余り最澄の『法華秀句』中巻の輪読会を行つた。七月八日（月）まで全部で八回の読書会で一くぎりとなり、中巻全体も読了はできなかつたが、ポールは最澄の仮性観について認識を深め、私は最澄の文体と議論の進め方に少しは慣れた。続けて私は自分で『伝教大師全集』にみられる中國華嚴諸家の引用について調査してみた。特に法相宗の徳一との論争においては華厳をあらゆる面で採用しているが、後には『五教章』「建立乘」などを批判し、天台法華宗と華嚴宗との間に上下の一線を画していることも確認できた。またポールの下で学んでいたデイビッド・ガーディナーと一月から二月にかけて空海の文献について語り合う時間を持ったが、その際空海も最澄と同様に法藏の「因分可説、果分不可説」という表現に関して、いずれも「果分可説」を主張している

ことに気付いた。つまり平安仏教の二大徳が共通して法藏教學を大いに意識しつつも、法藏は果分は説けないとしているが、自分たちは果分も説けるのだと言うわけである。この共通の言明がいかなる意味と重みを持つのか私には何も判断できないかと思い、あえて書きとめておく次第である。

次にポールとの研究では九月からの大学院ゼミでの『大乗起信論』の輪読会のことを記しておくべきであろう。先にも述べたように秋学期のポールの授業三つすべてに出席したが、学部の授業二つはポールの名調子を拝聴するだけであった。拝聴とはいいうものの、よく聞きとれず、英語がちょうど手ごろな子守り歌になつて、よく居眠りしてしまい、「よく居眠りをする日本人」ということで有名になつてしまつた。そこで汚名挽回のつもりで『起信論』ゼミの方では少々頑張った。九月十一日(水)から毎週一回約三時間、⁽²⁰⁾ポールの自宅で行なわれたゼミへの参加者は以下の通りである。

ジョン・パウアーズ君

アン・ラジャスさん

ディビッド・ガーディナー君

これら三人の学生とポールと私の計五人がポールの書斎で首を寄せ合つて勉強した。学生たちはだいたい進みそちな所まで各自英訳してくる。ポールは『仏教大系』本で注釈書まで

でも予習し、学生の訳を順次点検する。時々は私にも意見が求められ、ジョンの日本語力が少々弱いのでポールが通訳した。要所要所では中国の諸注釈書の説と私の意見とを並記したチャート(図表)を作つて行き、時間をもらつて説明した。真諦訳の『起信論』にはかつてコロンビア大の教授であったハケタ氏の英訳⁽²¹⁾があるが、ポールの意見ではかなり問題がある翻訳のことであつた。この演習はポールが将来源信あたりを研究する際の有力な基礎となろう。私は終始真諦訳と実叉難陀訳とを見較べながら、学生たちとポールとのやりとりを聞いていた。学生たちがすなおに疑問を提出し、納得できるまでねばるのに感心した。また真諦訳は実叉難陀訳に比べると「性」の字の用例が多いなどとの印象を持つた。このゼミは十二月十一日(水)十三回を以つて終了した。十二月六日(金)第十二回目の時に撮つた記念写真一葉が残つている。

次に一月からの春学期では大学院の授業「日本宗教史」に二月十九日(水)まで十一回出席した。このクラスには先の三名の学生に加えて、ダン、ビル、ジョージなどといった他の大学院生、さらに学部の有志学生も出席し、活発な議論が往来し、大変おもしろかつた。特に先のジョンや、ビル、ジョージといったホブキンス門下の学生たちは日本仏教によほど異和感を抱くらしく、一一ポールに質問し、時には大激論ともなつた。またこのゼミではポールが時々学生に特別発表を

命じたが、ディビッド・ガーディナー君には空海についてのリポートが求められた。そこでディビッドと私との間で、そのリポートの準備をも兼ねて一月二十三日(水)から合計六回毎回約三時間の特別勉強会を行つた。先ず私の『華厳禪の思想史的研究』に拠つて、華厳の教判から空海の十住心への視点を提示し、さらに華嚴の成仏論から空海の即身成仏説への通路の有無を検討した。周知のごとく空海の視野には澄觀までが入つてゐるし、十住心の第九に華嚴が位置づけられてゐることからも從来から彼の教学における華嚴の重要性はよく言及されるところであるが、まだまだ研究が進んでいるとも言えないようである。ディビッドの研究の進展に大いに期待したい。⁽²³⁾

このようなわけで当初考えていた程には「日本における華天両宗の交流」についての共同研究は進まなかつた。これはひとえに私の怠慢による。しかしポールとディビッドのおかげで最澄と空海に対しても中国および日本の華嚴教學が共通の重要な背景の一つと成り得ているという一つの視点は獲得できたようである。

三 生活と旅行

三月三十日(土)から四月四日(木)までは大学の施設の一つインター・ナショナル・センターに滞在した。その施設の責任

者のローナ・サンドバーグ女史の御世話で大学に近いヴァージニア通りのポールさんの家の三階のアティック(屋根裏部屋)を借りることができた。一階にも中国の北京の社会科学院から法学校で研修していた吳新平氏も住んでいて、特に九月からは大いに交流を深めた。交流といつても彼が私の所にテレビを観に来て、私が教えた日本の将棋を二、三番指すといった程度であった。おたがいに単身赴任の中国と日本の男性が一人、わけのわからぬ英語をつぶやきながら屋根裏部屋で日本の将棋をさしている。もしも窓の外からこの様子をのぞいた人がいたとしたら、その異常さにおどろき、たまげたことであろう。

主人のアルサー・ポールさんは八十五歳にもなるが、長身で、よく私の部屋にテレビを観に来られて、必ず三十分以上居眠りをしてゆかれた。夫人のフランシスは七十五歳ぐらいで、若い時はさぞかし美しい方であつたろうと思われる。よく主人を「アルサー」とどなり、三本足のナポレオンという犬を抱いて車を運転し、買物に出かける。そして敬虔な長老派教会の信者である二人は毎日曜日威儀を正して教会へ出かけてゆく。私の吉津という名前はどうもアメリカ人にはむつかしいらしい。最後まで御一人からは「ミスター・ジャパン」あるいは「ドクター・ジャパン」と呼ばれ、あげくの人はポールからは「吉津さん、まだドクターを取っていない

でしょう」と皮肉られた。

単身赴任にはいろいろの問題があるが、何といつても食べることが最大の課題である。その面では五月に帰国された東海大学の荒木昭次郎先生御夫妻が電気炊飯器を残しておいて下さったのは大変助かった。日本で毎日食べている米よりもはるかに美味しいカリフォルニア米を毎日食べた。ともかく御飯さえあれば、おかげは何であろうと日本食である。それでも一人でよく分らないテレビを観ながらの食事は、たとえビール付きでも味氣無いものである。そこで時々の御招きは、気分転換と栄養補給を兼ねて、まことにありがたいものである。

まず四月から五月にかけてはグローナー家が毎週いろいろのメニューでもてなして下さった。また先述の荒木先生や、さらにホスト・ファミリーになつて下さったポーチ家もたびたび招いて下さった。さらに六月からは神戸外国语大から経済学部に来られた山上宏人先生の御家族にも大変御世話になつた。特に教育学校で博士修得をめざしている川地洋一氏と私と一緒に栄子夫人の手料理をよく御馳走になつた。その他、歴史学教授アーリンソン夫妻、大学の事務官のミドルタン夫妻、大学院生のガーディナー家、同じく大学院生のパウアーズ家、日本語の先生をしている鈴木明さん夫妻、広島大学の数学の先生である吉田敏男さん、同じく広大からの英米文

学の田中久男先生、広島経済大で英米文学を講ずる森岡力先生、さらにコーンエル大で博士を取り、一年だけヴァージニア大で心理学を講じていた高野陽太郎さん等々に御招きにあづかつた。何といつても先の川地洋一さんとの懇親会の多さが目立つ。また彼は十月二十六日(土)シェナンドア国立公園に連れていってくれ、アメリカ流の紅葉を満喫した。

さて旅といえばポールが家族と一緒に、あるいは彼と二人だけで、ちよくちよく、いろいろの所へ車で運んでくれた。まず五月十七日(金)にはポール家とコロニー(植民地)時代のアメリカの街並を保存しているウイリアムズバーグに行つた。このウイリアムズバーグはもう一回十一月十八(水)、十九(木)の両日ポールと共にウイリアム・アンド・メリードのヴァンホーン⁽²⁴⁾先生宅に一泊し、先生からも重ねて丁寧に御案内いただき、思い出深い場所となつた。

次に六月十二日(水)にはポールの母校イエール大に行き、彼の恩師ワインスタイン先生を尋ねた。先生も御酒がお好きで二晩にわたつて、もてなして下さつた。周知のごとく先生は我が仏教学部の卒業生で、平井俊栄、岡部和雄、山上太秀といった諸先生方と同窓であり、東大の印度哲学科の大学院を修了後、ロンドン大からイェール大の教授になられたのである。先生の御宅では駒大時代の成績表や優等生の賞状など⁽²⁵⁾を拝見し、また今年出版予定の御本の原稿タイプを見せて

いただいた。私もはりきって楽しい仏教学なるものを開陳したが、少々はずみすぎて、十五日から十六日にかけてのニューヨーク見物は頭がぼーとしていた。

さらに六月二十八日(金)と二十九日(土)ポールの弟ノーマン夫妻の家に一泊し、ワシントンD・Cのスミソニアン博物館に行つた。この日程の前にすでにインド大統領もアメリカを公式訪問し、この時期大々的なインド博が催されていた。スミソニアンの広いモール(遊歩道)にはインドから直接多数の芸人や樂士が来ており、また多くのインド留学生たちも集つてきており、インドに来ているかのような錯覚におそわれた。シンディ・グローナー夫人の直接の専門はインドネシア音楽(ガマラン)であるが、もともとはインド音樂をも研究していたので、一つ一つの催し物を丁寧に見学していた。私はその時に見学した「インド彫刻展」を印象深く思いかえす。

ヒンズー教の神々の間に仏菩薩がちらほらとたたずんでいた。ヒンズー教の神々は力と欲望の権化の姿を示していたが、仏菩薩たちはあくまで静謐をあらわす。しかし、仏菩薩たちは我々の方に向つて歩いて走っているではないか。のちに七月二十八日(日)ポーチさん一家と日本からのホームステイの女子大生二人ともう一度インド展を見に行つた。この時はすでにインドの芸人たちはモールには居なかつた。

さて、八月九日(金)から月末までの約三週間の旅行ほど苦

本—稻田—傳—ハイネといった一つの系譜が現存することにもなる。十二日(月)はペン大⁽³²⁾やダウントウンを見学し、十三日(火)朝ボストンに向う。この朝駅に向う車の中でスティーブが日本航空機の大惨事のニュースを知らせてくれた。

ボストンではハーヴィード大⁽³³⁾とM・I・Tを見学し、十五日(木)の午前近代美術館を一巡りした。十五日夕方のアーム

トラック(汽車)で午前三時四十一分バッファロー駅着。町が近いと錯覚し、歩き続けて、くたぶれはてた。おまけに稻田先生へ連絡がつかない。疲れはてて、あのナイアガラ瀑布を眼前にした時、頭がクラクラとするのを覚えた。バッファローからの旅は三十一日(土)シャーロットビルに帰りつくまですべてグレイハウンドという名の長距離バスを利用した。十八日(土)クリーブランド一泊、十九日、二十日両日シカゴ見学。シカゴ⁽³⁵⁾大も歩いてみた。二十一日(水)にはすでにマジンに入つた。ここではY・M・C・Aに泊つて、いろいろ珍体験を重ねつつ、二十五日(日)の学会の始まるのを待つた。

二十五日午後あんなつかしい袴谷先生とステューデント・ユニオン(学生会館)の前で会つた。そしてその晩は平川 彰先生はじめ日本の方々に御会いし、懇親会が開かれた。学会の内容については次項で報告しよう。

二十九日(木)朝またグレイハウンドでシカゴに行き、シカゴで一泊して、シンシナティに向う。シンシナティではレッ

ズとバイレーツの大リーグの試合を観た。この日は残念ながら御目当てのピート・ローズはヒットを打たなかつた。三十一日(土)十二時間近くバスにゆられて、シャーロットビルに帰りついた。途中ウェスト・ヴァージニアの高原の夕景しきが今でも眼に焼き付いて、残つてゐる。

秋の旅は何といつても全米の宗教学会への参加のためにロサンゼルスに行き、さらにサンフランシスコやバークレーに立ち寄つたことが最大であるが、これは次項にまわすとして、クリスマス休みのフィラデルフィア行き、一月と二月二回のワシントンD・C行き、さらに帰国に至るまでの旅について簡単に記そう。十二月二十三日(月)早朝のアームトラックでフィラデルフィアに向う。なつかしいスティーブの家に着く。しかし何か変だと思う。すなわち隣近所はクリスマスだというのでギンギラギンに飾りたてているのにユダヤ系アメリカ人であるハイネ家にはクリスマスの飾りはない。車の中でスティーブが「この時期仏教徒とユダヤ人とはおもしろくないです」とつぶやいたのには苦笑した。私は日本人の感覚として、一応クリスマスに何かを期待していたからである。悪いことにロンダは妊娠して、しかも風邪をこじらせ、私が行つた日から寝ついてしまつた。スティーブはため息をつきながら奥さんの世話をしつつ、また私をも接待する。そのような悪条件の中でスティーブと私はアメリカにおける

道元研究について話し合つた。また一日かけてプリンストン⁽³⁶⁾まで連れていってくれた。

一月十七日(金)と十八日、一泊してパスポートの更新申請のためにワシントンD・Cを行つた。前には歩かなかつたホワイト・ハウス、アーリントン国立墓地、そして大使館通りなどを歩いた。アーリントン国立墓地には日本の靖国神社と同じように戦争をくりかえす思想が流れていることを実感した。二月十一日(火)日本大使館分室(ウォーターゲートビル群内)でパスポートを受領した。この日はすごい雪の中をトマス・ジェファーソン記念堂、リンカーン記念堂、そしてジヨージタウン⁽³⁷⁾大まで歩いた。この大学には中心部に学生ための寮がある。そこにまで入り込んだ私は係の学生にI・D(身分証明)を求められ、始めて寮だとわかり早々に退散した。

一月十五日(土)ディビッド・ガーディナー、優子夫妻主催のおわかれパーティが開かれた。出席者はポール夫妻、ポールの弟夫人アンマリー、ダン、ジョン、シンディ、ジャネット⁽³⁷⁾、川地さん、そしてガーディナー夫妻と私との十一人。寄せ書きではポールが「もう君が授業で居眠りしている姿が見れないのはさみしい」と書いた。次に二月二十三日(日)のポール夫妻主催のおわかれパーティはマヤ嬢の突然のインフルエンザで中止となつた。二十五日(火)九時四十五分、例の十人乗りの飛行機で出発した。ポールとアニヤ嬢、そしてガー

ディナー夫妻、それに川地さんが見送つて下さつた。いつものことながら時間に遅れ、飛行場のさくの所で懸命に手をふつてくれている川地さんの姿にさみしさを感じた。そしてガーディナー夫妻からのプレゼントへの添書きによつて機内で始めて優子さんのおめでたを知つた。

十二時前にノーザンプトン空港についた。そこにはジェミー・ハバート⁽³⁸⁾が待つっていた。マジソンの学会以来の再会である。彼の夫人の真紀さんがスマス大の日本語の先生になつて赴任したためにジェミーも居をマジソンからノーザンプトンに移したのだが、彼は当然のこととしてスマス大で海野大徹先生に会う。そこでジェミーはウェスコンシン大で清田先生の指導の下で「三階教」についての博士論文をまとめつつ、一方では海野先生の授業の手伝いもしているわけである。そのような人間関係の中で私のことも話題になり、先生から帰国途中立ちよつて、ゼミに出席し、何か話すようになるとすすめられたのである。先生は春学期のテキストとして西谷啓治著『宗教とは何か』の英訳本⁽⁴¹⁾を使つておられる。その中の論理と華厳思想との接点について指摘してほしいとのことであつたが、満足いく解答は与えられなかつた。ただ英訳で読むと日本語でかつて読んだ時には感じなかつた論理の飛躍が眼についた。海野先生のゼミにはスマス大の女子学生だけではなく、アムハースト大など他の四大学からも出席していた。先

生と私の意見が終始平行線のままだったので学生もとまどつたことであろう。二十七日（木）夜のパーティではアムハースト大のサーマン先生夫妻にもお会いした。またジェミーの自宅で御自慢のコンピューターを拝見した。

二十八日（金）ピーターパンバスで再びボストンに行く。ハ

ーヴィード大で研究しているジョン・マクレイ(42)に会うためである。彼もやはりワインスタイン門下で、ポールの友人である。彼の家に四泊して禅宗史の研究についていろいろ話しこそした。今年中には北京禪の本が出版され、次に神会についての本を用意している。また一九八七年七月にハーヴィード大学全米の中国禪宗史研究者を集めて「六祖壇經」の総合研究をやりたいというプログラムを準備しており、駒大からもできたら参加してほしいということで、その要項は田中良昭先生や石井修道先生におとどけした。またジョンのおかげでハーヴィード大の永富正俊教授(43)にもお会いし、アメリカ仏教学の動向をおうかがいした。その御話よりも、自分はこれまで二十八人の博士を出したといわれたことが印象に残っている。

さて、これからはロンドンに飛び、オックスフォードに今も研究を続けておられる丸小哲雄外国語部教授の家に約一週間滞在し、オックスフォードとロンドンを見学し、続いてパリに飛び友人のフレデリック・ジラール(46)、直子夫妻に御世話を

になり、パリとパリ近郊を見学して三月十八日（火）帰国したわけである。パリでも二、三の仏教学者に御会いしたが、今は主題からはずれるので割愛しよう。

四 二つの学会へ参加

こちらの方はすでにちょっとふれたが八月二十五日（月）から四日間のマジソン、ウェスコンシン大における仏教学会、そして十一月二十三日（土）から四日間にわたって、ロスアンゼルスの近くのアナハイム市ヒルトンホテルで開催された全米の宗教学会、この二つの学会に参加できたことは私にとって大変有益であった。もしもこれら二つの学会に参加していなくて、ただシャーロッソビルに居て、単にあちこちを旅しただけであるならば、たとえ私の願望がこもつているとしても、表題に「アメリカ仏教学」と出すことは躊躇したことであろう。まあ、たとえ「管見」にしても、複数の仏教研究者なり仏教学者なりの顔を拝見し、握手し、ある場合には友人ともなつたのであるから、その一端なりとも報告しておきたい。

さてマジソンのウェスコンシン大学での「日本仏教に関する日米学者会議」は清田実教授(47)の発意、招集によるものである。しかし、日本側の平川彰先生の大変なバックアップがあつての実現であったことは言うまでもない。そして榜谷

憲昭先生の事務的な面での努力が会を推進せしめたのであつた。平川、袴谷両先生の御苦心、御努力は私がアメリカに出発する前によく拝見していたことであった。アメリカに行つてから何の案内も無かつたらしきポール・グローナーから参加の人選のやり方についてかなり厳しい批判も聞いた。これについては私には判断する力はない。この学会の三日間を貫く共通テーマは「宗教体験と教義」となつてゐる。この共通テーマの下で、少々プログラム上の変更はあつたが二日間の進行は次のようであつた。

第一日（八月二十六日）

「日本の仏教思想の形成に与えたインドおよび中国仏教の影響」⁽⁴⁹⁾

司会 ポール・グリフィス、川崎信定

発表 梶山雄一「日本の仏教思想にみられる中觀佛教の影響——親鸞教における廻向、空そして授記」（不参加、中止）

荒牧典俊「瑜伽唯識の唯心思想と鎌倉佛教」

高崎直道「日本佛教思想の基調としての一乘義」

松長有慶「インドの密教から日本佛教へ」⁽⁵¹⁾

討論者 ウィリアム・グロスニック⁽⁵²⁾、ジョン・キーナン⁽⁵³⁾、ナン

シー・シュスター⁽⁵⁴⁾、桜部 建、袴谷憲昭、江島憲教

第二日（二十七日）

「新宗教」

司会 サリー・キング⁽⁵⁵⁾、阿部美哉

発表 バイロン・エアハート「日本佛教と新宗教——力としての

仏教——

宮家 準「新宗教における修驗道の影響」

清田 実「解脱会——現代日本における神道佛教融合の事例研究」

久保繼成「魂の開発という靈友会の考え方——現代の菩薩行——」

ヘレン・ハーディ⁽⁵⁷⁾「立正佼成会の法座について」⁽⁵⁸⁾

討論者 ジュラルド・クック⁽⁵⁹⁾、ロバート・モレル、ステュワード

ト・ガスリー⁽⁶¹⁾、荒木美智雄、田村芳朗、山折哲雄

第三日（二十八日）

「仏教とキリスト教との相互影響」⁽⁴⁹⁾

司会 ジョーン・キーナン、ヤン・スティングド⁽⁶²⁾

発表 ジェイムス・ハイシング⁽⁶³⁾「異宗教間の対話——エートスへの試み——」

井門富二夫「仏教とキリスト教——対立と影響——」（不参加、中止）

荒木美智雄「赤岩栄の晩年の佛教への近接——一人の日本人基督教者の経験についての文化的そして社会的次元——」

リッチャード・デュルモン⁽⁶⁴⁾「八木誠一の紹介」

討論者 ポール・グリフィス⁽⁶⁵⁾「仏教とキリスト教との間の対話の可能を求めて」

討論者 トーマス・ディーン⁽⁶⁶⁾、キース・ヤンデル、遊佐道子⁽⁶⁷⁾、

ルーベン・アビト⁽⁶⁹⁾、山折哲雄

以上のような進行であつた、これらすべてを論評する力も時間も持ちあわせていないので、一、二、三の印象を述べるにとどめたい。第一日目は梶山先生の欠席ということもあり、またテーマが広すぎ、さらに発表者全員が日本側学者といふこともあって、やや迫力とまとまりに欠けていた。第二日目が最も議論が白熱していた。靈友会については久保継成会長自らが発表されたが、司会者から「久保さん、本日は会長としての立場からの発表ですか、あるいは仏教学者としてですか」と質問され、一同爆笑した。ニアハート教授のペーパーの中で徹底してタイムバウンドブレイズムとタイムレスブレイズム、つまり「時間にしばられる仏教」と「時間を超越した仏教」といった二分法で日本の仏教を論じ、後者のエリートの伝統に対して、前者の民間宗教を置くといった形で論じていたのには大きな疑問を感じた。第三日目はまことにむつかしい議論の連続で懇親会でかれの私の頭の上を通過していく。山折先生ですら日本語で発言したいとおっしゃる程度だ。その際の遊佐道子女史の名通訳ぶりだけが印象に残った。ここで発表したポール・グリフィス氏の京都学派批判については袴谷憲昭先生が別の場で広く論究されたと聞き及んでいたので、その公刊を心よりにしよう。何しろ、この学会では日本からの諸先生方との懇親がゆきとどきすまい、ほとんどアメリカ側の学者との交流を行なわなかつた。残念なひとでは

あつたが、私の努力不足であつたと諒めざるをえない。

次にアナハイム市のホテル、ヒルトンで行なわれたアメリカ宗教学会の報告をしよう。これはやはり全米の聖書学会と複合学会であった。仏教の研究者が発表する場としては他にも哲学会⁽⁷²⁾あるいはアジア学会⁽⁷³⁾などもあるようであるが、組織的にはこの宗教学会が最大のようである。一九七一年に始まり、一九八五年で第十五回を数える。十一月二十一日（金）ポールと共にピッツバーグ経由でロスアンジエ尔斯国際空港に到着。バスでアナハイムヒルトンに行く。デズニーランドがすぐ横にみえる。翌二十二日から二十六日午前まで足かけ四日間の学会であった。この学会のすべてを紹介することはできないので、ポールのチャックにむねやうい、特に仏教の発表を列挙すると次のようになる。

November 23 (Saturday)

A 14 Comparative Studies in Religion

Theme: Poetry and Meditation

Robert M. Gimello, University of Arizona; Poetry in the

Kung-an in Ch'an Practice

Gary L. Ebersole, The Ohio State University; Poetry and Place in the Japanese Religious Tradition

A 20 Buddhism

Theme: Issues in Buddhist Biography and Hagiography

Alan Sponberg, Princeton University, Presiding

Paul Groner, University of Virginia; Ryogen : The Role

of Ritual and Debate in a Monastic Career

Jan Willis, Wesleyan University; Searching for the Bio-

grapher's Life: The Case of Yeshe-rgyal-mtshan

Peter N. Gregory, University of Illinois; Tsung-Mi in

Context

James C. Dobbins, Oberlin College; Shinran and Pure

Land Buddhism: The Making of a Patriarch

November 24 (Sunday)

A 31 Comparative Studies in Religion

Theme: Sacred Objects and Personal Charisma

David Eckel, Harvard University, Presiding

David Eckel, Harvard University; The Image of Relics

and Amulets in Madhyamika Philosophical Literature

Masatoshi Nagatomi, Harvard University; Problems in

the Introduction of Buddhist Relic Worship in China

Gregory Schopen, Indiana University, Bloomington; Bones,

Books and the Body of the Buddha: The Problem of

the Physical Availability of the Sacred in Indian Bud-

dhism

A 52 Buddhism

Theme: Consciousness in the Abhidharma Tradition

Braj Sinha, McGill University, Presiding

Collett Cox, University of Notre Dame; On the Possi-

bility of Objectless Consciousness: Sarvāstivāda and

Dārśāntika Opinions

Paul Griffiths, University of Chicago; Memory, Conscious-

ness and Cognition in the Abhidharmaśabḥāya and

Its Commentaries

Leslie S. Kawamura, University of Calgary; Abhidharma

Implications in Vinitadeva's Sum-cu-pa'grel-pa

Karen Christina Lang, University of Virginia; Buddhag-

hosa on the Cognitive Series (Cittā-vithi)

Shanta Ratnayaka, University of Georgia; Metapsycho-

logy of the Abhidharma

Braj M. Sinha, McGill University; Consciousness and

Models of Transcendence in the Abhidharma

A 65 Japanese Religion

Theme: Re-Reading / Writing Religion in Early Japan

Richard B. Pilgrim, Syracuse University, Presiding

Robert S. Ellwood, University of Southern California;

Patriarchal Revolution in Ancient Japan: Episodes from

the Nihonshoki Sūjin Chronicle

Alan L. Miller, Miami University, Ohio; The Confluence

of Structure and Symbol in Japanese Myth and Folk-

tale

Respondent:

Gary L. Ebersole, Ohio State University; The Open

Boundaries of Myth, History and Poetry in Early Japan

A 68 Process Thought and Nishida School of Buddhist

Philosophy

Theme: Authentic Existence
Tokiyuki Nobuhara, Claremont Graduate School, Presiding

Francis H. Cook, University of California, Riverside;
East-West Perspectives on Authentic Existence
Respondent:

Seisaku Yamamoto, Kyoto University

John B. Cobb, Jr., School of Theology at Claremont;

Authentic Existence in Christian Whiteheadian Perspective

Respondent:

Masa Abe, University of Hawaii
Fritz Buri, University of Basel; Buddha-Christ as Lord
of the True Self: The Philosophy of Religion of the
Nishida School and of Christianity

Respondent:

John C. Maraldo, University of Northern Florida

November 25 (Monday)

A 83 Japanese Religion

Theme: Problems of Categorization in the Study of
Japanese Religion

Theodore M. Ludwig, Valparaiso University, Presiding

Neil McMullin, Sweetbriar College; Problems in the History and Historiography of Premodern Japan

James H. Foard, Arizona State University; When Is a Tradition Not a Tradition?: The Riddle of Japanese Taoism

Richard Gardner, Sophia University, Tokyo; Rips in the "Seamless World": The Nō Texts

Respondent:
Helen Hardacre, Princeton University

わたくしは紹介したくないが、だいたい省略したが、以上が仏教関係発表の大槻やある。実は私はめぐみに発表を聽いたのはポールの船井のみであったので、ひねりすくいを縦糸するふくせやめたる。ひねりのうわ西田哲学の船井といつては東京理科大学の田中 裕氏の紹介があのじ参照していただけた。

船井の発表はほんと聴かなかつたが、ポールは多くの仏教研究者を紹介してくれた。先の一覧表の舟山せ、ロバート・ジメロ、ギャリー・エバンス、トラン・ベノバーグ、ジョン・カーラズ、リーター・グレンジャー、ジヒイマス・ダムハバ、ネイル・トクダハハ、ジヨン・トゥルビ、ルシル・ルハ・ペーリカーの諸氏たれどある。あた発表してしまった人じゅうじゅへロー・トロートン、ロバート・ペドウル、チーリッシュ・チャップル、ヒュー・ギルディ、スティブン・カーシ、ルカヤベ・ランカスター、リチャード・ルカウリンなども知

り合いになつた。これらの中でもランカスター、ジメロの両先生はアメリカ西海岸地方の仏教研究のリーダーと御見受けした。第一日目（二十三日）の夕刻、グローナー、グレゴリー、スボンバーグ、マラルド、バスウェルといった人々と中華料理の円卓をかこんだ。これらの人々が次の時代のアメリカ仏教学の旗手となつてゆくことは間違いないと思う。

ところで、この学会に関連し、ロスアンジェルスの禅センターとバークレーの仏教研究所のことを少し紹介しておこう。

十一月二十四日（日）夜、学会に参加している学者を特別に集めて仏教とキリスト教の対話交流についてのシンポジウムをやるということで、始めて禅センターに行つた。前角博雄師

の多彩な活動については私の力を越えた面があるので、今は師が近年発願された黒田研究所から出た一冊の本のみを紹介し、またこれから出版予定にも言及しよう。まず第一の本は『禅と華嚴の研究』と称し、ロバート・ジメロとピーター・グレゴリーの共編で次の諸論が含まれる。

ジョン・フリード「摩訶衍和尚の禅観」

ジョン・マクレイ「牛頭禅について」

ジョン・マクレイ「初期禅宗の流れ」

（93）

本書については多分専門の方からの批評紹介もあることであらうし、私自身も今夏一読してみたい。アメリカの道元研究については次項でも少しふれてみたい。

さて禅センター及び黒田研究所発行の新聞『十方』（The Ten Directions）の一九八五年春季号によると、黒田研究所かねは次のような本が出版の予定だとある。

William Powell "The Record of Tung-shan (廻三)"

John McRae "The Northern School of Chinese Ch'an"

とジメロ論文を引用言及することができたはずであつて、この本の存在を知らなかつたことは汗顏の至りである。

次に『道元研究』は一九八一年タサハラの禅センターで開催された道元学会の成果をまとめたものであるが、次のように諸論より成つてゐる。

ウイリアム・ラフルア（95）「学会における道元」

カール・ビールフェルト（96）「真竜再彫—道元研究の歴史とドグマ」

ヘン・ジン・キン（97）「文字の道理—道元と公案」

トーマス・カスース「比類なき哲学者道元—正法眼藏をいかに読むか——」

阿部正雄（98）「修証—等—手段と目的の関係づけについて」

ジョン・マラルド（99）「道元の身心学道の比較哲学的考察」

フランシス・クック（100）「道元の本来の面目とその社会倫理的意義」

ロバート・ベラ「今、道元の意味するもの」

Peter Gregory "Traditions of Meditation in Chinese Buddhism"

いざれもなかなかおもしろそうな本であるから鶴首して待とう。また黒田研究所が禅関係だけではなく広く仏教研究者のために発表の場を提供され、ますます発展することを祈念したい。

十一月二十六日（火）、両親のところへ一時立ち寄るポールとは別に私はロスアンゼルス空港からオークランドに飛んだ。飛行場にはケン・タナカ氏⁽¹⁰⁾が待っていて下さった。藤井教公氏と共に駒大の私の研究室に来られ、御会いして以来の再会である。これから一十九日（金）サンフランシスコ空港でポールと待ち会わす時まで、楽しいサンクスギビングの夕べも含めて、タナカさんの御家には大変御世話になった。公恵夫人、長男アーロン君の名をも記して感謝の意を表したい。

ここではタナカ氏がマネジャーとしても、また教員として勤めている仏教研究所（I・B・S）⁽¹¹⁾について簡単に紹介しよう。これは西本願寺系の研究所として一九六六年に設立された。当初は教師（minister）養成のための大学院であったが、昨年一九八五年からはキリスト教やユダヤ教などの神学校合同大学院（G・T・U, Graduate Theological Union）ともタイアップして、教師をめざさない一般の研究者にも広く門戸が開放されている。また隣りにあるバークレー校の大学院の授

業にも出席し、それも単位として認定されるとのことであつた。I・B・S自体の教員には日系の方々が多いが、その中にスリーランカの学僧が一人加っているのが眼を引く。また夏期講座なども開いて広く一般の人々にも参加を呼びかけている。この研究所も先の黒田研究所と同様に研究、教育、教化の一体化をめざしているといえよう。しかし黒田研究所以上にこの研究所の組織はきちんと整つていて、実際、私もこの研究所でマスターをめざしている多くの方々に御会いした。授業やテストがあるわけであるから外国人のための英語能力テスト（トライフル）が最低五〇〇点は必要であろうが、駒大仏教学部の卒業生でこのような研究所への入学をはたし、国際的に活躍する人が出てほしいものである。

五 アメリカの仏教研究

以上のようなわけで一回の学会に参加することができ、またポール・グローナーから折々にアメリカの仏教の研究の意見を聞くことはできた。しかし、それだからといって、この項の表題を論ずることが全く私の視野を越えていることは重承知している。しかし冒頭の「管見」という言葉に免じていただき、少々のまとめ的なことを列記してみよう。

さて、平井俊栄先生は『駒沢大学仏教学部論集』第八号（昭和五十二年十月）に「新北米大学事情——U・B・Cとア

メリカの大学——」を書かれた。これを参考にさせていただいたアメリカの仏教研究者の人的広がりについて考えてみたい。平井先生の示された一覧表では先ず東部としてイニール大学、ペンシルヴァニア大学、ペンシルヴァニア州立大学、コロンビア大学、バッファロー大学、スミス大学、ハーヴィード大学、デューク大学などが仏教研究者が存在するか、あるいはM・A及びPh・Dの修得が可能な大学として列挙されている。次に中西部の諸州の中ではウェスコンシン大学とシカゴ大学とが取り上げられ、西部ではカリフォルニア大学・ロサンゼルス、カリフォルニア大学・リバーサイド、カリフォルニア大学・バークレー、スタンフォード大学、ハワイ大学、ワシントン大学などがリスト・アップされている。⁽¹⁰³⁾

平井先生がこの表を出されて約十年経つたわけであるが、現状はどうであろうか。これまでの私の学者の紹介からみて、ハーヴィード、イェール、コロンビア、シカゴ、ウェスコンシンそしてカリフォルニア大学・バークレー校の六校あたりがM・A及びPh・D修得の本場であることは今でも變ってはないようである。ただ私の行っていたヴァージニア大でもホブキンス門下からそろそろPh・D修得者が出ているし、ステイブン・ハイネのようにペンシルヴァニア大を卒業後テンプル大の傳教授の下でPh・Dを取った人もいる。私が仏教学会での報告のために作つた表では今や仏教研究者は南部諸州

の大学にまで及んでいる。これから予想としては先の六大学に加えて、プリンストン大学、ヴァージニア大学、カリifornia大学あたりからもどんどんPh・D修得者が出ると思われる。ただアメリカの大学制度の場合、そこにどのような教授が居るかによって学者地図が一変する可能性があるので流動的な面のあることは言うまでもない。たとえばヴァージニア大でもホプキンス教授が就任されてから多くの学生が集り、すでに複数の博士が誕生しているのであり、またこのたびボール・グローナーがテニュアを獲得したことにより、日本や中国仏教の研究を志す大学院生が全米から雲集することが予想されるのである。

次に仏教研究の方法の問題を取り上げてみよう。まず第一にはシカゴ学派に代表されるような徹底したフィールド・ワークによる研究がある。この研究方法によると仏教の教義よりもむしろ儀礼や教団の方面の解明に光が当たられる。宗教學あるいは宗教社會學の一環としての仏教研究ということは宗教哲学、さらには比較思想の面からの研究がある。テンブル大学のように神学や哲学の伝統の強い所ではこの傾向の仏教研究の方法がよく取られるようである。これら二つの両極にはさまれてフィールドに近いサイドに歴史學的方法が、

哲学に近いサイドに文献学的方法が位置づけられよう。イェール大学のワインスタイン門下は、先生の指導によつて徹底した歴史的方法に立脚し、比較思想的研究を批判する。もちろん、今の分類は私の一存であつて、研究者自身は研究対象によつて、いくつかを併用するであろう。フィールドと歴史、歴史と文献、文献と哲学といったぐあいな併用はむしろ自然でもあるが、フィールドと比較思想といった取り合わせはむつかしいようである。よく解釈学 (hermeneutics) といった言葉が学者の間で飛びかつていたが、これは文献をはさんで歴史から哲学に至るまでを含んでの方法論的反省と見受けられる。また哲学を通りこして神学的といつてもよい程の方法も設定できそうにも感じられたが、今はただ言及するにどめたい。

さて、次には研究分野別に概観してみよう。これも調査報告ではないので私の独断と偏見によるることを了解いただきたい。またアメリカの仏教研究者に、一部の方々を除いて、日本でのような宗派意識は存在しないが、今は便宜上日本の学会レベルでの宗派がらみの分野名称を用いたい。まず何といつても眼につくのは禅および禪宗の研究の隆盛であろう。華嚴を研究したり、天台を専攻している人でも禅に関してだけは一家言を持つてゐる。なかでも道元禪は学会で最も注目を集めているといつてよいであろう。そのような傾向の中で一

九八一年タサハラの禅センターで道元学会が開かれ、先に紹介したような『道元研究』として結実したわけである。すでに奈良康明先生が「海外から見た道元」⁽¹⁰⁵⁾で紹介されているように鈴木俊隆⁽¹⁰⁶⁾、フランシス・クック、ジイユー・ケネット、フィリップ・カブロー⁽¹⁰⁸⁾、ヘー・ジン・キムといった学者や老師たちの著作に続いて、トーマス・クレアリー⁽¹⁰⁹⁾やノーマン・ワッデル⁽¹¹⁰⁾の『正法眼藏』の翻訳、スティーブン・ハイネ、トーマス・カスース⁽¹¹¹⁾、タケシ・コデラ⁽¹¹²⁾、ディビッド・シャーナー⁽¹¹³⁾などの著作も注目されるところである。もちろん先の『道元研究』に名をつらねていたカール・ビールフェルト、ウィリアム・ラフルレー、ジョン・マラルドといった人々の道元に関する専著もいすれ期待されることであろう。

このようにアメリカでは道元研究が注目されているわけであるが、まず良質の英訳が多く出なくてはならない。そのためには我が駒沢大学においてももつともと『眼藏』などを現代の日本語に移したり、真に研究の名に値する論攷が多く出ていなくてはならない。アメリカの道元学者たちは駒沢学派に眼を向けてはいるが、どうももう一つ決断できずに何となく伝統のありそうな京都に趣くのである。「道元のものは原文で読めなくてはどうしようもない」とうそぶいてみたり、論文も書かないで勝手な眼藏解釈をもてあそんでいるようでは、それこそどうしようもないである。それから言いつい

でにもう一つ言わしてもらえばアメリカの禅研究者のうちにも誠に謙虚な方々が多く、彼らは心から日本の学者の来米を待ちのぞんでいる。禅学系の先生方は順次二年に一回は必ずアメリカの禅センターに在外研究員として行くことを義務づけることを提案したい。アメリカの仏教学者は日本からの三藏法師の飛来を待ちわびている。

さて道元研究以外にも地道な禅研究が公刊されているので、二、三紹介してみよう。注ですでにワッデル氏の盤珪の研究を紹介したが、ピーター・ハスケル⁽¹⁴⁾にも『盤珪禪』という本がある。またマーチン・コルカット⁽¹⁵⁾やディビッド・ポラック⁽¹⁶⁾の五山文学研究、ジェイムス・サンフォード⁽¹⁷⁾の一休、ロヤル・タイラー⁽¹⁸⁾の正三、フィリップ・ヤンボロスキ⁽¹⁹⁾の白隱、そしてバートン・ワトソン⁽²⁰⁾の良寛の研究などが注目を引く。さらに私は日本は帰つてから、イエール大学ワインスタイン門下で、駒沢大学に来て石川力山先生の指導を受けて中世曹洞禅の歴史を勉強し、Ph.D論文にまとめ上げようとしているウイリアム・ボディフォード⁽²¹⁾氏に会い、アメリカの禅研究の深まりを改めて実感した。

さて別な分野に眼を転じよう。禅といえば淨土を連想し、またアメリカへの日系移住の中で淨土真宗信徒の占める率は最も高いので仏教活動としては長い歴史と広がりを誇るわけであるが、研究の方はどうなのであろうか。これについては

すでに大谷大学の真宗総合研究所紀要・創刊号（一九八三年）にロバート・ローズ（Robert F. Rhodes）氏が「歐米における淨土教研究の紹介」（Bibliography of English-Language Works on Pure Land Buddhism, 1960 to the Present）という形でまとめておられるので便利である。詳細はそれにゆずるが、私のメモにはティビッド・チャペル、ショイムス・ダビンス、レオ・ブルーデン、グレゴリー・シモン、ケネス・タナカなどの名前が記されている。タナカ氏が「英文による良い淨土教の概説書がない」と言つていたことを考え併せて、個々の研究や原典の翻訳はあるいは禅以上であつても、総合的な立場からの著作が少いのであろうか。禅の方では何といつても鈴木大拙の仕事が一代でそれをやつてのけてしまつたのである。友人になつたダビンス氏やタナカ氏の大成を期待しよう。

次に華嚴、真言、天台などの分野はどうであろうか。華厳についてはラン・ユンファ⁽²²⁾先生をはじめサリー・キング、ジュフリー・ブロートン、ピーター・グレゴリーなど宗密の研究が眼につく。宗密教学における禅と華嚴との接点が関心を集めるのであろうか。これらの中ではグレゴリー氏が専著を公刊するだろう。華嚴の専著としてはすでにゲルマ・チャン、フランシス・クック、トーマス・クレアリーなどのものがあるし、最近はスティーブ・オディン⁽²³⁾も義湘の『一乘法界図』

の研究を出した。これらはいずれも労作ではあるが、私の眼からみると哲学に走りすぎて、歴史的見地を欠如している。その点では歴史に十分考慮を払っているロバート・ジメロ氏が早く一冊を公刊されることを期待したい。次に韓国の仏教の中でも知訥の研究が二、三眼につく。⁽¹²⁷⁾ すでに紹介したロバート・バズウェルにも專著があるが、彼は華嚴の領域でも活躍するだろう。

天台では大御所レオン・ハーヴィッジ⁽¹²⁸⁾ 先生は別格として、中國仏教としてはデイビッド・チャペル、ダン・ステファンソン⁽¹²⁹⁾、そしてポール・スワンソン⁽¹³⁰⁾ が有望であり、日本仏教としてはポール・グローナーの独壇場であろう。真言はすでにヨシト・ハケダ、ミノル・キヨタの両先生が先鞭をつけたが、あまり研究が進んでいないようである。デイビッド・ガーディナーの精進に期待しよう。最後に日本および中国の仏教史に関して有益な書物を二、三指摘するにとどめたい。また大変研究が進んでいるはずのインドやチベットの仏教については残念ながら、あまり情報を集めることができなかつた。⁽¹³¹⁾ そこの分野についてのドウ・ヨング先生の紹介批評の論文⁽¹³²⁾ を教えて下さった袴谷憲昭先生に感謝し、それを生かしきれなかつたことを御許しいただきたい。

最後にアメリカにおける仏教の研究の定着の意義を考えて、この報告をしめくくろう。ヴァージニア滞在中毎週日曜日の

午前中はどのテレビのチャンネルも専属の牧師さんが教会やスタジオで御説教するのが放映される。「ああ、たしかにキリスト教の国に来たのだなあ」という実感を深めた。それにもどうしてプロテスタントの牧師はあれほどまでに情熱をこめて、熱狂的に演説し、そして信者たちもそれによつて興奮するのであろうか。建国から現代のパックス・アメリカーナ（アメリカ帝国主義による世界の平和維持の主張）に至るまでのアメリカの誇りはあるのピューリタニズム（清教徒主義）を中心としたプロテスタントが支えてきたものではあろう。

しかしながらアメリカはそのような純一なイデアや信条に支えられて進展する程に単純な歴史を歩んでいるのではなく、まったく逆に今に至るまで複雑多岐な、まことにおどろおどろしい歴史を歩み、これからもそれは変ることはないであろう。平和に暮していたインディアンの眠りを打ち破つたことが彼らの建国と称するものの実状であり、心ならずもいやいやながらアフリカから連れてこられた黒人たちの多くの犠牲の上にいわゆる白人たちの繁栄が築かれていった。南北戦争は州と州との争いともいわれるが、黒人たちと白人たちとの争いの始まりといつてもよいであろう。

さて、西部の開拓は多くのアジア系の人々をその労働力として必要とし、またナチス・ドイツのユダヤ人迫害は多くのユダヤ系の人々のアメリカ移住をうながした。現下、あのヴ

エトナム戦争の結果、いわゆる難民たちがアメリカに移住する。これは何故かはわからないが韓国からの移住者も多いと聞く。さらに問題は隣国のメキシコあたりからのヒスパニック（スペイン語をしゃべる人々）と称する人々の流入である。アジア系の人々はつとめて英語をしゃべろうと努力するが、ヒスパニックたちの中には英語を話そうとしない人々もいる。つまり「英語をしゃべらないアメリカ人」の出現は大きな国内問題ともえなっている。

このようなアメリカの歴史と現状を見る時、我々は United States of America をまさに「アメリカ合衆国」と訳すことが実状にぴったりするのを知るのである。すなわち州と州との連合として成立したアメリカであることを原名はよく示しているが、今やアメリカはいろいろの人種と民族のるつぼとなつていて「合州国」よりも確かに「合衆国」つまり「いろいろの人々が集つている国」と呼ぶにふさわしいのである。このような情況のもとでもワスプ（WASP、白人、アングロサクソン、プロテスタント）がアメリカの本流であるとは半ば公然と語られてはいるが、それは多分それほど長い世紀にわたって有力な言葉として存続するとも思えないのである。

このようなアメリカにあって仏教研究はどのような意義を持ち、どのような形で定着するのであろうか。先にも紹介した『道元研究』の中でロバート・ベラは近時のアメリカにお

ける禅の流行が、これまでのヨーロッパ系の思想による個人主義をもつともつと満足させる、いわば超個人主義（radical Individualism）の原理を与えていると批判を加える。たしかにベラの指摘はするどいと思う。ある種の個人の悟りを得ることを目的とする禅はたしかにヨーロッパ思想にもとづく個人主義など側にもよせつけない程の独立自存というか、あるいは自尊を示すであろう。現今のアメリカ人の多くがベラが指導するようにこのような自尊の思想にひきつけられているのかもしれない。しかし、これでは将来にまでわたつてアメリカの社会を益するものとはならないだろう。

私はベラが言うように仏教は超個人主義だとは思わない。何か共同体の支えになりうるものを仏教は持つてていると思っている。しかし共同体といつても日本のように「縦社会」ではない、まさに先にみたような「人々のるつぼ」をつなぐことが必要なのである。キリスト教もその努力をするであろう。ただこの思想はあるアーリントンの国立墓地をもつともつと拡大することを必然ならしめるような国家主義と手を結ぶ可能性はないだろうか。私はアメリカにおける仏教研究、ひいては仏教学の成立が、アメリカにおける仏教研究、と、そして個人主義との両方を克服し、「人々のるつぼ」の中に、これまでアメリカにはなかつた新しい共同体が成立していくことにつながっていると確信する。今はまだまだ移植

の仏教の歴代である。中国の仏教の歴代区分をからり畳み、それが南北朝時代のやうなものである。これが、それが大陸唐仏教にゆき出るやうなやうだ、ふねばアメリカ仏教が草の根のよるに生れたりするやうなやうだ。私は多くの友人たちの仏教研究の歴史の中からその芽が育つてこられるやういの體や見たやうだ。アメリカ仏教学への賛歌を唱へ、私の聲をこねるべくもんじた。

■

- (一) University of Virginia, Charlottesville, Virginia (VA 22903) U.S.A.
- (二) The School of Medicine, The School of Law, The School of Engineering and Applied Science, The Curry School of Education, The Colgate Darden School of Business, The School of Architecture, The School of Nursing, The McIntire School of Commerce, The College of Arts and Sciences
- (三) Afro-American and African Studies, Anthropology, Archaeology, Art, Asian Studies, Astronomy, Biology, Chemistry, Classics, Comparative Literature, Drama, Economics, English, Environmental Sciences, Foreign Affairs, French, German, Government, History, Latin American Studies, Linguistics, Mathematics, Medieval Studies, Music, Philosophy, Physics, Political and Social Thought, Psychology, Religious Studies, Rhetoric and Communication Studies,

Russian Studies, Slavic Languages and Literature, Sociology, Spanish

(四) Professors: James F. Childress, David Little, William L. Miller, K. L. Seshagiri Rao, Robert P. Scharlemann, Nathan A. Scott Jr., Kenneth W. Thompson, Robert L. Wilken; Associate Professors: M. Jamie Ferreira, Gerald P. Fogarty, Harry Y. Gamble Jr., Paul J. Hopkins, Benjamin C. Ray, Abdulaziz A. Sachedina; Assistant Professors: Larry D. Bouchard, Joseph A. Brown, John A. Corrigan, Carlos M. Eire, Paul S. Groner, Martin S. Jaffee, Karen C. Lang; Lecturers: Daniel S. Alexander, Ellin K. Deese, Judith L. Kovacs, Richard B. Martin (The University of Virginia 1985—1986 Undergraduate Record に載る)

(五) ルセツル大寺の教説部編集第十回取、昭和五十八年十四、二二八
教授だ。

- (六) 龍溪大寺の教説部編集第十回取、昭和五十八年十四、二二八
III回
(七) Geshe Wangyal
(八) The Lamaist Buddhist Monastery
(九) Professor Robert A. F. Thurman, Amherst College (Amherst, Mass. 01002)、韓國の大師、海輪大徹教授の妹で
夫の Smith College (Northampton, Mass. 01063) に在り
教授、十九歳大學生に十才のペーク・ヤドキーラ先生に

裡会こした。彼の高さ、大がいな先生がカニバウーチャーの
あなたの想ひ、かんがへりやぐらめへる、日本におかれ仏教研
究くの批判やわねた歴史が眼前に立つてゐた。

(15) Mrs. Elizabeth Stirling Napper' 夫人やドヤンバ先生

の指導や轉じゆ修練した。一九八五年五月二十九日、大学
セミロッカハタヒシノヘモトス・ラスルハグド羅文翻訳会
が行なれた。私も現地やわねただんだ。羅文の題は「De-
pendent-Arising and Emptiness — A Tibetan Buddhist

Interpretation of Mādhyamika Philosophy Emphasizing
The Compatibility of Emptiness and Conventional Phe-
nomena」 ピーロハラム大の Alex Wayman 教授の解釈
くの趣しの批判を加へてゐたが、アレクサンダー・ワーマーが教へて
くれた。

(16) Jeffrey Hopkins "Meditation on Emptiness" Wisdom
Publication, 1983

(17) Univ. of Washington (Seattle, Wash, 98199)

(18) David Seyfort Ruegg' 総監督トトカスル・スルギー
同の釋義やだべ然然ハハハハノ大なるマサの大学に移る
だスルハムハーメスルギー・スルガーナム置いた。

(19) American Academy of Religion, 23-26 November 1985,

The Anahaim Hilton and Towers (777 Convention Way,
Anahaim, California) Sunday Afternoon, November 24,

A 52 (Buddhism), Karen Christina Lang (Univ. of Vir-
ginia) "Buddhaghosa on the Cognitive Series(Cittavithi)"

(20) Paul Groner "Saichō — The Establishment of the

Japanese Tendai School——" Berkeley Buddhist Studies
Series Vol. 7, 1984

(16) Professor Stanley Weinstein, Yale University (New
Haven, Conn. 06520)

(17) 壮士修業 Saturday Afternoon November 23, A 20 (Bu-
ddhism) Paul Groner, University of Virginia, "Ryogen:
The Role of Ritual and Debate in a Monastic Career"

(18) REL 104 Introduction to Eastern Religions TR 11:
00-11:50 + section
Mr. Groner

This course is an introduction to five major Asian reli-
gious traditions: Hinduism, Buddhism, Confucianism,
Taoism, and Zen. The objectives of the course are: 1)

to explain the basic doctrines of these religions, 2) to
discuss some of the approaches which may be taken in
the study of religion, and 3) to challenge and explore
some of our basic assumptions about religion. Among
the topics discussed will be: whether God is a necessary
part of religion, the relation between man and nature,
and the forms which mysticism assumes.

REL 210 INTRODUCTION TO BUDDHISM MW 1400
-1515
Ms. Lang

This course is an introduction to Buddhism, surveying
its history and development from its origins in India to

its spread into south, central and east Asia. Theravada, Mahayana, and Tantric Buddhist thought and practices, as well as these traditions, views of the Buddha and the path to enlightenment will be discussed. Texts include: deBary, The Buddhist Tradition, Rahula, What the Buddha Taught, Suzuki, Zen Mind, Beginner's Mind, and Lama Yeshe, Wisdom Energy. No prerequisites. Mid-term and final examinations.

REL 317 BUDDHIST MEDITATION 1100-1215 TR

Mr. Hopkins (3 credits)

An introduction to Buddhism by way of exploring meditative techniques and practices used for attaining enlightenment. Meditation manuals from Tibetan traditions will be examined and compared, providing a survey of Buddhist techniques for non-attachment, love, compassion, penetrative insight, and integration of the personality through visualization.

Prerequisites: none.

Requirements: mid-term exam, paper, and final exam.

REL 318 JAPANESE RELIGION TR 0930-1045

Mr. Groner

This Course is an introduction to Shinto and Japanese Buddhism and their roles in Japanese culture and society. Among the topics discussed are syncretism between Buddhism and Shinto, the relationship between folk reli-

gion and the monastic traditions, the development of uniquely Japanese forms of Zen and Pure Land Buddhism, the use of Shinto as a nationalistic ideology, and the survival of magic and exorcism on a modern society.

THERE ARE NO PREREQUISITES FOR THE COURSE.

REL 543 SANSKRIT RELIGIOUS TEXTS TBA

Ms. Lang

Readings in Sanskrit religious and philosophical texts... their syntax, meaning and translation. Prerequisite: One year of Sanskrit or instructor's permission.

REL 545 SEMINAR ON HINDUISM: BHAKTI M 15 30-1800

Ms. Lang

This seminar will explore the devotional tradition (bhakti) of Hinduism through a study of the myths of gods and goddesses and the songs of their devotees. Texts include: Dimmock, In Praise of Krishna; O'Flaherty, Hindu Myths, Ramanujan, Speaking of Shiva and Hymns for the Drowning, and Sen, Grace and Mercy in Her Wild Half.

Requirements: class reports and term paper.

REL 546 SEMINAR IN MAHAYANA BUDDHISM TR 1400-1515

Mr. Hopkins

The prime focus of this course will be to compare the

- (33) 小池義人 Yoshito HAKEDA “Kukai: Major Works” (Columbia Univ. Press, 1972) そのうち、この翻訳の用経論の部分を除いては、まだ題題性を持ったものである。
- (24) College of William and Mary (Williamsburg, VA 23185) 全米ドリーム田に古く成立大。Prof. Jack D. VanHorn ペーリー仏教の専門家。現在ウーバーハーバ大学や清田 実教授とのシル博士論文を準備している後根定座出かと思われる。
- (25) Stanley Weinstein “Buddhism Under The T'ang” (Cambridge University Press)
- (26) U.S.-Japan Conference on Japanese Buddhism (August 25-28, 1985, Univ. of Wisconsin, Madison, Wis 53706) 「日本仏教に選ばれ日本学者領縫」の公認の大槻義久が次節で報じた。
- (27) Steven Heine and Rhonda Temple University (Philadelphia, PA 19122) 该教学部卒業の眞田由美子やえせんの大学の宗教学部大学院に入学した。
- (28) Steven Heine “Existential and Ontological Dimensions of Time in Heidegger and Dōgen” (State University of New York Press, Albany, 1985)
- (29) Villanova University (Villanova, PA 19085)
- (30) Prof. Kenneth K. Inada, Department of Philosophy, State University of New York at Buffalo, N. Y. 14260
- (31) University of Pennsylvania (Philadelphia, PA 19104)
- (33) Harvard University (Cambridge, Mass 02138)
- (34) Massachusetts Institute of Technology (Cambridge, Mass 02139)
- (35) The University of Chicago (Chicago, Ill 60637)
- (36) Princeton University (Princeton, N. J. 08544)
- (37) Mr. Janed Gellert 大学院生。彼とは約1ヶ月間一緒に英日語交換教授を行った。指導はレイ教授だが、ホールについて天台の儀礼の研究もあつた。
- (38) Mr. Jamie Hubbard 彼については注6の橋谷先生の「アシハハ難在記」と幅広があつた。
- (39) 注の参照
- (40) Professor Taitetsu Unno 先生が東京大学院印度哲學在籍時代、奈良康明先生のおすすめで、私たち一・B・E・メンバーが英語弁論大会出場に際し、発音などをお手伝ひただされた。それがねりた。やがて来年の再会であった。
- (41) Keiji Nishitani “Religion and Nothingness” Translated by Jan Van Bragt (University of California Press, 1982) 訳者は原著と「回向記」の如きのセイコット教神學の用語を使いつら circumstantial 用語。
- (42) John R. McRae 日本の難在の始祖ひぐみ駒大や石井修道先生のヤマと出逢った。その後、京都に行く。こまもなく友人の紹介で、やがていたが、また学問に復帰。現在は、一ヶ月でノースダコタの Fairbank Center for East Asian Research 研究員。
- (43) John R. McRae “The Northern School and the For-

- (3) John Keenan (Buddhism and Christianity) ルセント
ミドルベリ大学基督教文化研究所員。後の後、Middlebury
College (Middlebury, Vt 05753) にてやがての教説を述べた。Monday After-
noon November 25, A 94, Religion and the Social Sciences; Helen Hardacre, Princeton University, "The Chang-
ing Meaning of "Text" in a Japanese Buddhist New
Religion"
- (4) Nancy Schuster (Buddhism)
- (5) Sallie King (Philosophy of Religion and Buddhism),
University of Southern Illinois' 彼女はア・ア・アルスの
講義を聽いた。Sunday Afternoon November 24, A 58,
Comparative Studies in Religion; Sallie B. King, Southern
Illinois University, "Experience and Interpretation in
Mysticism"
- (6) Byron Earhart (History of Religion), Western Michigan
University' 她は彼女の存在を認めた。"Japa-
nese Religion—Unity and Diversity—" (The Religious
Life of Man Series, Wadsworth Publishing Company, 19
82), "Religions of Japan—Religious Traditions of the
World—" (Harper and Row, 1984)' にて、論議した。
また著書の「新宗教の概要」、著書を終った。
- (7) Heren Hardacre (History of Religion), Princeton Uni-
versity' 彼女は次の講義を聽いた。"Lay Buddhism in Con-
temporary Japan; Reiyūkai Kyōdan" (Princeton Univer-
sity Press, 1984)' また次の本を出版した。"Kuro-
zumiko and The New Religions in Japan" (Princeton
University Press, forthcoming)' など日本文化の翻
訳
- (8) 三井の新宗教の影響とその影響を受けた
Byron Earhart "Japanese Buddhism and New Reli-
gion: Buddhism as Power", Miyake Hitoshi "The Influ-
ence of Shugendō on the 'New Religions'", Minoru
Kiyota "A Case Study of Shinto-Buddhist Syncretism in
Contemporary Japan", Kubo Tsugunari "The Reiyukai
Concept of Inner Self Development: Contemporary Bod-
hisattva Practice", Helen Hardacre "Hōza: The Dharma
Seat"
- (9) Gerald Cooke (History of Religion), Bucknell Univer-
sity (Lewisburg, PA 17837)
- (10) Robert Morell (Japanese Literature and Buddhism)
Washington University in St. Louis (St. Louis, Mo. 63
130) 她は次の本を聽いた。"Sand and Pebbles (Shase-
kishū)" (State University of New York Press, 1985)
- (11) Stewart Guthrie (History of Religion), Fordham Uni-
versity (Bronx, N. Y. 10458)
- (12) Jan Swyngedouw (History of Religion), Nanzan Uni-
versity

- (3) James W. Heisig (Philosophy of Religion), Nanzan University
- (4) Richard Drummond (Buddhism and Christianity), Dubuque University (Dubuque, Iowa 52001)
- (5) 摂利田曰く「釋迦とキリストの神の精神」James W. Heisig “Interreligious Dialogue: Enterprising on an Ethos”, Ikado Fujio “Buddhism and Christianity: Conflict and Influence”, Araki Michio “Sakae Akaiwa’s Late Opening to Buddhism: Cultural and Social Dimensions of A Japanese Christian’s Experience”, Richard H. Drummond “Introducing Yagi Seiichi”, Paul J. Griffiths “On the Possible Future of the Buddhist-Christian Interaction”
- (6) Thomas Dean (Philosophy of Religion), Temple University (Philadelphia, PA 19122)
- (7) Keith Yandell (Philosophy of Religion), University of Wisconsin (Madison)
- (8) Yusa Michiko (Nishida Philosophy), Western Washington University (Bellingham, Wash. 98225) 彼女の講義分野はロクハラニモレ。たゞ、A・A・Rの次のみで発表せられた。Monday Morning November 25, A 74, Round Table Sessions; Michiko Yusa, Western Washington University “Seeing and Acting: Zeami’s Philosophy of Art”
- (9) Ruben Habito (Buddhism and Christianity), Sophia University

- (10) American Academy of Religion
- (11) Society of Biblical Literature
- (12) American Philosophical Association
- (13) Association of Asian Studies
- (14) 田中 総「歐米における黒田知重——国際会議 Process Thought and Nishida School of Buddhist Philosophy と玉露」と「『釋迦』」「『阿弥陀』(1986年)所載
- (15) ハーバード大学東洋学部学部長、博士論文は中国華厳の智嚴と称するものである。“Chih-yen and the Foundations of Hua-yen Buddhism (unpublished Ph. D. Dissertation, Columbia Univ. 1976) まだ後に紹介する黒田研究所などた『釋迦華嚴の研究』をルーター・カムーニー・エリザベス博士集」、皿の舟煙灰器の上に繪文を載せてある。“Li T’ung-hsuan and the Practical Dimensions of Huayen” 講壇でトド、シテムのコーダーで、とてもいた感じの方である。
- (16) ハカラ大系、キタガムラ。今は万葉集を研究している。流暢な日本語で語る。
- (17) カナダのトマホーク・クロハムア大、ノーハ・ペーリー博士、中国唯識を研究している。最近、早稲田大学の石井公成氏が彼の論文の一つを訳出した。「ハノムの中国における唯識——11世の注釈やゲルの研究——」(新田大作編『中国思想研究論集——歐米思想よりの照射』雄山閣出版、昭和六十一年二月所収)
- (18) 彼女は私が出会いた唯一の黒人仏教学者。私がカトリック

ア大に行つた一九八五年の春学期は客員教授で教えていた。彼女には次の著書がある。“On Knowing Reality”(New

York, Columbia Univ. Press, 1979)

79 ハリゾアード大で、ナガトミ教授門

研究所のディレクターをつとめる。博士論文は“Tsung-mi's

Inquiry into the Origin of Man: A Study of Chinese

Buddhist Hermeneutics” である。ひれは間もなく出版され

る予定である。彼は禅センターの前角老師の下で長年坐禅し

て いる 求 道 者 で あ る。

(80) イエール大でワインスタイン門下。二年間龍谷大で勉強、

達者な京都弁を話す。日本の浄土真宗の歴史的研究をまとめ三、ハギヤー式の出版局、トコロ出版部。

(1) 皮の日本語も十ばらい。皮ては次の著書がある。“Buller”

(8) 福井義典著『十六世紀の日本と天皇』(岩波新書)、Buddhism and the State in Sixteenth-Century Japan" (Princeton Univ. Press, 1984)

(82) ミュンヘン大出、京都で西田哲学を学ぶ。彼にはハインリ

ツル・デュ・セーラン教授との共著で次のものがある。“Buddhism in the Modern World”(New York, Macmillan)また後に紹介する黒田研究所の『道元研究』にも論文を寄せている。

(83) 彼女については注57を参照。今やシカゴ学派の仏教研究を代表する学者であろう。二十四日の朝食をポールと共に三人

(4) Jeffrey Broughton (California State University, Long Beach) ハロハムト大、ヤハズロバサ一五七。雙十繩文は
や取へた。日本人がこの日本語を驚嘆する。

(15) Robert E. Buswell (University of California, Los Angeles) 彼の著書『韓國禪宗史』(The Korean Approach to Zen) (Univ. of Hawaii Press, 1983) がある。そして改めてランカスター教授のトド『金剛圓明經』の研究や博士号を昨年取り、就職した。

(16) Kueifeng Tsung-mi: The Convergence of Ch'an and the Teachings (unpublished Ph. D. Dissertation, Columbia Univ. 1975) 京都やは柳田聖三先生などの押導を取る。今は中国初期禪宗史文献の英訳を行ふ。彼の田舎にも御同じ、おたロングビーチなどに連れて行かれてやうだ。「あなたがトマトの仏教研究を本筋どもへ思ひもゆるだ」 との厳しい質問をされた。

- (28) Lewis R. Lancaster (University of California, Berkeley)
教説は次のようには取扱ふべく。“The Korean Buddhist Canon: A Descriptive Catalogue” (Univ. of California Press, 1980), “Early Ch'an in China and Tibet” (Whalen Lai and Lewis R. Lancaster eds. Berkeley, California, Berkeley Buddhist Studies Series, 1983) 教説の歴史は
次々優秀な学者が誕生してゐる。アーヴィング・カーリル、ヘンリック・カーリル、トマス・カーリルなど、仏教界のヤハターフォーラムへと移り田舎へ
と田舎へ。その驟驟とした風貌は人を惹きつける。

(29) Miriam Levering (University of Tennessee) ハーパー
＆大江、カカニ・エドワード。駒大江石井修道先生の死と死後、
大藏研究の研究を行ふ。また昨年は石井先生たる中国旅行
を行ひた。彼女の笑顔はめいよい日本的である。しかも
母象徴であった。耳へ本を手にするとアラカルムだった。

(30) The Kuroda Institute (923 South Normandie Ave. Los Angeles, CA 90006) 前角姓は東方の文化と種類だった。私
のやうの出生があつた黒田光泰相の義父とおなじであります
を知るに知れた。

(31) “Studies in Ch'an and Hua-yen”, edited by Robert M. Gimello, Peter N. Gregory (The Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism No. 1, University of Hawaii Press, 1983)

Jeffrey Broughton; Early Ch'an Schools in Tibet Luis O. Gómez; The Direct and the Gradual Approaches of Zen Master Mahayana: Fragments of the Teachings

John R. McRae; The Ox-head School of Chinese Ch'an Buddhism: From Early Ch'an to the Golden Age Peter N. Gregory; The Teaching of Men and Gods: The Doctrinal and Social Basis of Lay Buddhist Practice in the Hua-yen Tradition

Robert M. Gimello; Li T'ung-hsian and the Practical Dimensions of Hua-yen

(33) Louis O. Gomez (The University of Michigan) 楽樂山
川“Selected Verses from the Gandavyuha”(Ann Arbor, Michigan, Univ. Microfilms Press, 1967), 黑柳哲也
“Barabudur: History and Significance of a Buddhist Monument” (Berkeley, California, Asian Humanities, 1980) だまくわ。

(34) “Dogen Studies” Edited by William R. LaFleur (The Kuroda Institute, Studies in East Asian Buddhism No. 2, University of Hawaii Press, 1985)

William R. LaFleur; Dogen in the Academy Carl Bielefeldt; Recarving the Dragon: History and Dogma in the Study of Dogen Hee-Jin Kim; “The Reason of Words and Letters”: Dogen and Koan Language

Thomas P. Kasulis; The Incomparable Philosopher: Dogen on How to Read the Shobogenzo

Masao Abe; The Oneness of Practice and Attainment:

Implications for the Relation between Means and Ends

John C. Maraldo: The Practice of Body-Mind: Dōgen's

Shinjingakudo and Comparative Philosophy

Francis H. Cook; Dōgen's View of Authentic Selfhood

and its Socio-ethical Implications

Robert N. Bellah: The Meaning of Dōgen Today

(5) William R. LaFleur (Professor of Japanese at the University of California at Los Angeles) 著『Mirror for the Moon: Poetry by Saigyō』(New York, New Directions, 1977), "The Karma of Words: Buddhism and the Literary Arts in Medieval Japan" (University of California Press, 1983) など。

(6) Carl Bielefeldt (Assistant Professor in the Department of Religious Studies at Stanford University) 1971年 原稿を研究せんたる題。

(7) Hee-Jin Kim (Professor of Religious Studies at the University of Oregon) 著『Dōgen Kigen: Mystical Realist』(Scholars Press, 1975) など。

(8) 岩出さとくの大著『禪と西方思想』(1980) 英

編著者 Masao Abe "Zen and Western Thought" edited by William R. LaFleur (University of Hawaii Press, 1985) など。

(9) Francis H. Cook (Associate Professor in the Department of Religious Studies at the University of California at Riverside) 著『禅の本義』(1980) 『禅の五教尊』(1982)

全英訳論文 "Fa-tsang's Treatise on the Five Doctrines: An Annotated Translation" (Unpublished Ph. D. Dissertation, University of Wisconsin, 1970) など。

"Huayen Buddhism: The Jewel Net of Indra" (Pennsylvania State Univ. Press, 1977) など。

道元寺訳『華嚴』 "How to Raise an Ox: Zen Practice as Taught in Zen Master Dōgen's *Shōbōgenzō*" (Los Angeles, Center Publication, 1978) など。

(10) Robert N. Bellah (Ford Professor of Sociology and Comparative Studies and vice chairman of the Center for Japanese Studies at the University of California at Berkeley) 著『Tokugawa Religion』 "Beyond Belief" "The New Religious Consciousness" "Varieties of Civil Religion" など。

(11) Kenneth K. Tanaka 大阪府立大学東京大学大学院岳度哲学科博士論文直道先生の指導を受ける。山本ひづな レンタルの研究に専念し、カウチャルリードバークノー校のハカベタ一教授にて中国唐土教、特に清影響の研究に転じ、今春博士学位を取得した。

(12) Institute of Buddhist Studies (2717 Haste Street, Berkeley, CA 94704) 『一』(1985) など。

の説明や著書などは、本書の後半で述べる。本書の中心ある諸君は吉津の研究室にペーパーをあわせるところを取扱う。今は「歴史と現況」の所だから軽載しておこう。

The Institute of Buddhist Studies (IBS) was founded in 1966 as a graduate school for the Buddhist ministry and for research. Founded by the Buddhist Churches of America (BCA), which is affiliated with the Honpa-Hongwanji branch of Jōdo Shinshū Buddhism, the Institute grants a Master of Arts degree. Since its inception, the IBS has graduated fourteen Jodo Shinshū ministers and eight ministerial candidates are presently pursuing their studies. In February, 1985, the IBS became an affiliate of the Graduate Theological Union. The GTU is the coordinating organization for the most inclusive concentration of religious educational resources in the world, and this marks the first time another major world religion has joined in a consortium with religious schools from the Judeo-Christian traditions. In addition to the IBS, the GTU numbers among its members three Roman Catholic and six Protestant seminaries, a Center for Jewish Studies, and eight other specialized centers and institutes. With this affiliation, the IBS and GTU now offer a joint M. A. program in Buddhist Studies which begins the Fall Semester, 1985. Approximately two-thirds of the courses will be taken at the IBS and the remaining courses will be taken at the GTU. With the establishment of this new joint program, the IBS expects to attract more non-ministerial students whose interests

are directed toward other academic or professional careers.

(13) 釋尊の「觀音之法」が「眞言」をもつて「般若」を「般若」にせん。

(14) Robert Thurman "Buddhist Hermeneutics" (Journal of the American Academy of Religion 46: 19-39, 1978) と

スル事焉。 Peter N. Gregory "Chinese Buddhist Her-

meneutics: The Case of Hua-yen" (Journal of the Ameri-

can Academy of Religion, 51: 231-249, 1983) なども

モウレバ、 John C. Maraldo "A Review of Some

Approaches to Hermeneutics and Historicity in the Study

of Buddhism" (藏振縦和本研究・本研究題目、 真言宗、 Shin

Buddhist Comprehensive Research Institute Annual Me-

moirs 3, 1985) なども参照しておこう。

(15) 『體圓演說』 明治時代の著者 (鶴巣村 1881年刊)

註引

(16) Shunryū Suzuki "Zen Mind, Beginner's Mind: Informal talks on Zen meditation and practice" (Weatherhill, 1970)

(17) Jiyu Kennett "Zen Is Eternal Life" (Dharma Publishing, 1976), "The Wild White Goose" Vol. I (Shasta Abbey, 1977)

(18) Philip Kapleau "The Three Pillars of Zen: Teaching, Practice and Enlightenment" (Beacon Press, 1968), "Zen: Dawn in the West" (Anchor Books, Anchor Press, New York, 1980)

- (¹⁰) Thomas Cleary “Record of Things Heard From the Treasury of the Eye of the True Teaching” (Prajñā Press, Boulder, 1980), “Timeless Spring: A Soto Zen Anthology” (John Weatherhill, Ins. of New York and Tokyo, 1980), “Entry Into the Inconceivable: An Introduction to Huayen Buddhism” (Univ. of Hawaii Press, 1983) 嵩巖の著した中国華嚴の翻訳と、杜澤、鶴巣、坂巻の翻訳を含む。このあたりの研究における正長の跡跡の成果を全く反映せねばならぬが残念である。
- (¹¹) Norman Waddell 大谷大學勤務。彼の著書は雄先生の『圓法盟藏』の英訳である。また彼は次の本を出版した。“The Unborn: The Life and Teachings of Zen Master Bankei” (North Point Press, 1984)
- (¹²) Thomas P. Kasulis “Zen Action / Zen Person” (The Univ. Press of Hawaii, 1981)
- (¹³) Takeshi J. Kodera “Dogen’s Formative Years in China: An Historical Study and Annotated Translation of the Hōkyō-ki” (Prajñā Press, Boulder, 1980)
- (¹⁴) David E. Shaner “The Bodymind Experience in Japanese Buddhism: A Phenomenological Study of Kūrai and Dōgen” (State University of New York Press, 1985)
- (¹⁵) Peter Haskel “Bankei Zen” (Grove Press, New York, 1984)
- (¹⁶) Martin Collcutt “Five Mountains: The Rinzai Zen Monastic Institution in Medieval Japan” (Harvard Univ. Press, 1981)
- (¹⁷) James H. Sanford “Zen Man Ikkyū” (Studies in World Religions 2, Scholars Press, 1981)
- (¹⁸) Royall Tyler “Selected Writings of Suzuki Shōsan” (Cornell Univ. East Asia Papers, No. 13, 1977)
- (¹⁹) Philip B. Yampolsky “The Zen Master Hakuin” (Columbia Univ. Press, 1971)
- (²⁰) Burton Watson “Ryōkan: Zen Monk-Poet of Japan” (Columbia Univ. Press, 1977)
- (²¹) William M. Bodiford, Yale University, Ph. D. Candidate
- (²²) Leo Pruden, College for Oriental Studies
- (²³) Gregory Schopen, Indiana University
- (²⁴) Yün-hua Jan (尹獻謙) Professor of Religion at McMaster University (Hamilton, Ontario, Canada) 『中日五山の傳記』(中日五山の傳記) 『東洋五山の傳記』
- (²⁵) Garma C. C. Chang (The Pennsylvania State University) “The Buddhist Teaching of Totality: The Philosophy of Huayen Buddhism” (The Pennsylvania State Univ. Press, 1974) “The Hundred Thousand Songs of Milalepa” 2 vols (Boulder, Colo Shambhala, 1979)
- (²⁶) Steve Odin “Process Metaphysics and Huayen Budd-

hism: A Critical Study of Cumulative Penetration vs. Interpenetration” (State Univ. of New York Press, Albany, 1982)

(127) Hee-sung Keel “Chinul: Founder of the Korean Son Tradition” (Berkeley Buddhist Studies Series 6), Jae Ryon Shim “The Philosophical Foundation of Korean Zen Buddhism: The Integration of Sōn and Kyo by Chinul” (Journal of Social Sciences and Humanities 50, 1979) 朝鮮國の佛教と題するも Peter H. Lee “Lives of Eminent Korean Monks” (Harvard Univ. Press, 1969) 朝鮮の

(128) Leon Hurvitz “CHIH-I: An Introduction to the Life and Ideas of a Chinese Buddhist Monk” (Brussels, L’Institut Belge des Hautes Etudes Chinoises, 1962), “Scrip-ture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma (The Lotus Sūtra)” (Columbia Univ. Press, 1976)

(129) Dan Stephenson, Fordham University 『醫祖禪』 の翻訳をもつて

(130) Paul L. Swanson が「大の農田実教説」に「『法華経義』の研究」を・とも取った。畠山・大谷大聖とみ近頃の眞宗総合研究所紀要第11号に次のもので論文を載る。 “Chih-i’s Interpretation of the Four Noble Truths in the Fa hua hsüan i” (Shin Buddhist Comprehensive Research Institute Annual Memoirs 3, 1985) 畠山は「農田大學佛教文化研究所」、彼との「大谷大聖の論文」に

也記述する。

(131) Delmer M. Brown and Ichiro Ishida “The Future and the Past, a translation and study of the Gukanshō: An Interpretative history of Japan written in 1219” (University of California Press, 1979), James W. White “The Sokagakkai and Mass Society” (Stanford Univ. Press, 1970), Diana Paul “Philosophy of Mind in Sixth-Century China: Paramārtha’s Evolution of Consciousness” (Stanford Univ. Press, 1984), Yi-ting Wang “A Record of Buddhist Monasteries in Lo-Yang by Yang Hsüan-chih” (Princeton Univ. Press, 1984), Sung-peng Hsu “A Buddhist Leader in Ming China: The Life and Thought of Han-shan T’ieh-ting” (The Pennsylvania State Univ. Press, 1979), Chün-fang Yü “The Renewal of Buddhism in China: Chu-hung and the Late Ming Synthesis” (Columbia Univ. Press, 1981), Judith A. Berling “The Syncretic Religion of Lin Chaoen” (Columbia Univ. Press, 1980)

(132) タイの三輪世界論をもつて論文を載る。 Frank E. Reynolds and Mani B. Reynolds “Three Worlds According to King Ruang: A Thai Buddhist Cosmology” (Berkeley Buddhist Studies Series 4, 1981), Stanley J. Tambiah “The Buddhist Saints of the forest and the Cult of Amulets” (Cambridge Univ. Press, 1984)

(133) たゞ・三八の『道教研究の歴史』 十三 雜誌 (春秋社' 1

九七五年）は一九七〇年あたりの成果に言及する。その後の『ローラ・ペニア・アメリカの特にイング、チベットの仏教研究について紹介批評した』・『ハング博士の讃歎せ』J. W. deJong “Recent Buddhist Studies in Europe and America”(The Eastern Buddhist, New Series, Vol. XVII No. 1 Spring 1984, The Eastern Buddhist Society) である。

(1986.7.24)

(追記) この初校の中途で奈良康明先生から『禅の現状』(禅ノクベ6、秋月龍珉編、平河出版社、昭和六十一年)に載せられた「世界の禅の現状—曹洞宗」を頂戴した。本稿に関連して、第一回のタサバラ禪堂での道元学会、第二回(一九八三年)のカリフォルニア州立大での道元学会の報告、サンフランシスコ禪センター、ロスアンジエ尔斯禪センター、そして禅ノクベ6の協会などの紹介がなされている。欧米におけるわれからの禅の問題点をまとめてあり、有益があるので参考していただきたい。(十月二十四日)